

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名

論 文 題 目

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	平石賢二
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	河野 莊子
名古屋大学心の発達支援研究実践センター教授	金子一史

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、青年期における臨床心理学的なテーマとして大きな関心が持たれてきた過剰適応について徹底した文献研究を行い、従来の研究にはなかった関係性の文脈という新たな観点を導入した研究を行っている。これまでの過剰適応研究では、過剰適応は個人のパーソナリティ要因に起因する一般的な対人行動の特徴としてとらえられてきた。しかし、本論文においては、青年にとっての重要な他者である両親、友人、教師という多様な他者との関係性において、過剰適応のあり方は異なる可能性があると考え、それぞれの関係性の文脈における過剰適応の特徴を明らかにする試みを行った。また、それを測定するための尺度開発の試み、関係性の文脈におけるそれぞれの過剰適応が生起するメカニズムと過剰適応が及ぼす結果について検討した。

本論文は 6 章で構成されている。まず第 1 章では文献研究(研究 1)が行われ、過剰適応の構成要素、過剰適応を引き起こす先行要因、過剰適応が影響を及ぼす要因に関する諸研究の整理を行った。そして、過剰適応概念には、内的不適応を伴う過剰適応と内的不適応を伴わない内的不適応のリスクファクターとしての過剰適応という異なる 2 つの捉え方があることを明らかにした。また、先行研究の問題点として、概念定義や過剰適応の構成要素が多義的であること、周囲の他者との関係性を考慮する視点が欠けている点を指摘し、その問題を解決するための本研究の目的と構成について説明している。

第 2 章(研究 2)では、大学生を対象にした質問紙調査によって、シニシズムと自己不全感という自他の認識が、過剰な外的適応行動である他者志向的行動と自己抑制的行動を媒介して抑うつに影響を及ぼすという仮説モデルの検証を行った。その結果、シニシズムは自己不全感に関連し、自己不全感 は抑うつに対する直接的な効果と、自己抑制を媒介して抑うつに影響を与える間接的な効果を示していることが分かった。また、これらの結果をふまえて、自他に対する認識、過剰な外的適応行動と抑うつの因果関係に関する考察を行った。

第 3 章(研究 3)では、新たな過剰適応の捉え方として、両親、友人、教師という異なる他者との関係性の文脈における過剰適応の様相に関する質的研究を行った。調査では大学生を対象にした回想法による自由記述の質問紙を使用し、青年期前期として位置づけられる中学生年代の過剰適応傾向と 3 種類の関係性における過剰適応経験のエピソードとその理由に関するデータ収集を行った。結果として、3 種類の過剰適応には、自己抑制と他者志向性の 2 側面、ポジティブな結果の希求またはネガティブな結果の回避、諦めや無力感という共通した特徴があることを見出した。また、それぞれの関係性の文脈における独自の特徴として、親子関係における親の期待や意向に沿おうとする心性とネガティブ情動の制御方略、友人関係における仲間集団への同調性とネガティブな評価へのおそれと関係性を維持したい心性、教師との関係における成績評価への懸念を背景とした教師の期待や要請に沿おうとする心性などが明らかにされた。

## 別紙 1 - 2

第 4 章の研究 4-1 では、青年期前期における過剰適応に関して、両親、友人、教師とのそれぞれの関係性の中での過剰適応の程度を測定する尺度の開発を行った。本尺度は、両親、友人、教師のそれぞれの関係性における他者指向性と自己抑制の 2 側面を測定する下位尺度から構成されている。そして、中学生を対象にした質問紙調査のデータにより確認的因子分析を行った結果、それぞれの関係性における関係特定の過剰適応の 2 因子(他者志向性と自己抑制)合計 6 因子と、さらにそれぞれの関係性の因子を結びつける関係一般的な過剰適応の上位 2 因子(他者志向性と自己抑制)からなる階層的な構造が示された。また、クラスタ分析により 3 つの関係性の文脈の組み合わせによる過剰適応の 7 つの異なる類型を抽出し、類型間の学校適応感、ストレス反応などの差異が明らかにされた。

続く研究 4-2 では研究 4-1 で開発された尺度の短縮版を作成した。そして、中学生を対象にした別のオンライン調査により、過剰適応の類型と自律性欲求との関連について検討した。その結果、関係全般における過剰適応、両親への過剰適応、友人に対する過剰適応と両親・教師に対する自己抑制という 3 つの類型において特に自律性の欲求不満が高く、欲求充足の感覚が低いことが明らかになった。

第 5 章の研究 5-1 では、研究 4-2 で作成された尺度を使用して中学生に対するオンライン調査を実施した。ここでは、3 つの関係性における過剰適応を予測する要因として、親の養育態度(自律性支援と達成・依存志向型心理的統制)とパーソナリティ要因(見捨てられ不安、自己志向的完全主義、社会規定的完全主義)に焦点をあて、パーソナリティ要因を媒介要因とした養育態度と過剰適応状態の因果関係に関する構造モデルの検討を行った。その結果、親の達成・依存志向型心理的統制は、両親に対する過剰適応状態、見捨てられ不安、自己志向的完全主義、社会規定的完全主義に直接的に関連していること、媒介要因である見捨てられ不安と自己志向完全主義はすべての関係性の文脈において有意な関連があり、見捨てられ不安から両親に対する過剰適応状態への影響を除いたすべての組み合わせにおいて、達成・依存志向型心理的統制から過剰適応への間接効果が有意であった。

また、中学生を対象にした別のオンライン調査(研究 5-2)では、友人と教師に対する過剰適応と、友人関係機能、ピア・プレッシャー、教師-生徒関係における受容、自律性支援、統制との関連を検討した。その結果、友人に対する他者志向性は友人関係と教師-生徒関係に関するすべての変数と有意な相関があること、特に友人関係におけるピア・プレッシャーは友人と教師との関係における他者志向性、自己抑制と中程度の有意な相関があり、重要な要因であることが明らかにされた。

最後に第 6 章では、上述した本論文の結果を総括し、本研究の意義と今後の課題や研究展望についてまとめている。特に今後の課題としては、縦断調査や実験的方法の必要性、調査対象の拡大、本論文で取り上げられていない関連要因の検討、測定方法の改善などが挙げられた。

本論文の特色と学術的意義としては以下の点が挙げられる。

- ①過剰適応に関する包括的な文献研究を行い、過剰適応の構成要素、過剰適応を規定する要因および過剰適応が影響を与える要因に関して体系的に整理したこと。
- ②これまでの過剰適応研究には全く見られなかった新たな視点として、親子関係、友人関係、教師との

別紙 1 - 2

関係という対人関係の文脈毎に規定される関係特定な過剰適応という概念を提唱し、それを測定するための心理尺度の開発を試みたこと。

- ③中学生を対象にした質問紙調査により、個人の過剰適応の状態は両親、友人、教師に対する他者志向性と自己抑制のあり方の組み合わせにより、多様に異なる類型が存在することを見出したこと。また、それぞれの関係性の文脈における過剰適応状態と関連する要因を明らかにしたこと。
- ④従来の過剰適応研究では十分に検討されてこなかったシニシズム、自律性欲求、見捨てられ不安、完全主義を重要な要因として取り上げ、一般的な過剰適応と関係特定の過剰適応との因果モデルについて詳細な検討を行ったこと。

これらの研究成果は、特に日本で関心が高い過剰適応研究に新たな方向性を示しており、今後の発展に大きく貢献すると考えられる。また、本論文の知見は、学校心理臨床の実践において、関係性文脈の多様性とダイナミックな文脈間の相互作用を理解する重要性を示しており、実践に有益な示唆を与えていると言える。

以上の論文内容に対して、審査委員からは以下の疑問点、問題点が指摘された。

- ①本研究で取りあげていない他者との関係性についてどのように考えるか。個人にとって意味のある他者とは何か。
- ②過剰適応には年齢要因は関わっているか。年齢と共にどのように発達していくと考えられるのか。
- ③過剰適応をリスクファクターとしてとらえているが、過剰適応におけるポジティブな側面はないのか。何を基準にして過剰とみなすのか。
- ④仮説モデルを検証する目的と尺度の妥当性検証の目的が混在しているのではないか。
- ⑤論理展開や用語使用の統一性において問題を感じる部分がある。

審査委員からのこれらの指摘に対し、博士学位申請者は研究の限界や課題について十分に認識しており、質疑に対する回答も的確であり妥当なものであった。また、これらの課題は今後の研究によって対処していくことが可能であると判断した。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士(心理学)の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。